

---

# ずっと、このままだよ

光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ずっと、このままだよ

### 【Nコード】

N0110Z

### 【作者名】

光

### 【あらすじ】

常磐亜紗美は、元気の良い活発な？歳の女の子。

ある日、クラスに男子生徒が転校して来た、彼の名は時田光孝と言う。

光孝は、頭が良くスポーツ万能なので、女子の中で告白する子もいたが。

「好きな子がいるから」と全員、断られた。  
はたして、光孝の好きな子は……？

? クラスに

朝7時。

ピピピピピ イ。

目覚まし時計が鳴って、亜紗美は目を覚まし部屋を出て、洗面所で顔を洗いいりびング行き母親。

「おはよう」

「おはよう」

挨拶を交わし、座り朝食を食べて部屋でランドルを背負い。

「いつてきま す」

家を出て、学校に向かい歩いていると肩を叩かれ、振り向くとクラスメイトの石橋麗子が立っでいて。

「おはよう、亜紗美」

「おはよう、麗ちゃん」

挨拶を交わし、学校に向かって歩いていると。

「ねえ、今日、転校生が来るの、知ってる？」

「知らない、なんで麗ちゃんが知ってるの？」

聞くと。

「昨日、職員室に行った時、ボードに書いてあったんの」

「ふうん、そうなんだ」

校門を潜り、教室に行きクラスメイトとしゃべっていると。

キンコーンカンコーン、キンコーンカンコーン。

チャイムがなり、担任が入って来て出席簿を教壇に置き。

「今日は、転校生が来ているので紹介します」

すると、生徒たちが騒ぎ始め出すと。

「静かにして下さい」

怒ると、生徒たちが静かになり廊下に向かって。

「じゃ、入って来て下さい」

1人の茶髪の男子生徒が入って来て教壇に立つと、担任がハワイボードにその男子生徒の名を書いた、時田光孝と。

「時田くんは、お父さんの仕事の関係でこの町に引っ越して来ましたが、まだ、わからない事があると知れませんでしたので、聞かれたら教えてあげて下さいね」

「はい」

返事をする。

「じゃ、時田くん、一言お願いします」

光孝の肩をポンと叩くと。

「初めまして、時田光孝です、よろしくお願いします」  
頭を下げると、担任が。

「常磐さん」

「はい」

返事をする。

「あの子の隣に座ってくれるかな？」

「はい」

返事をして、与えられた席に行き隣に座っている亜紗美に。

「よろしくね」

「こちらこそ」

席に座ると、出席を取って授業を始めた。

放課後。

亜紗美がランドセルの中に授業道具を入れてみると、麗子が来て。

「亜紗美、帰ろう？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩きながら

「ねえ」

「うん、何？」

「時田くんって、結構イケてるよね？」

「そうかな？」

首をかしげると。

「私、ああいう男の子、タイプなんだ」  
浮かれながら言い、麗子の家の前で。

「じゃあね」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰った。

？ キュン

光孝が転校して来て、5日が過ぎた。

頭も良く、スポーツ万能な光孝はクラスの人気者になっていた。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の前で、麗子に逢い。

「おはよう、亜紗美」

「おはよう、麗ちゃん」

挨拶を交わし、校門をくぐり教室に行き担任が来るのを待っていると、チャイムがなり担任が来て出席を取り算数の授業を始め、問題を書き。

「じゃ、この問題を時田くん解いてくれないかな？」

「はい」

席を立ち、ボードに書いてある問題を解き始め全問解くと。

「皆さん、合っていますか あ？」

「合ってます」

一斉に言つと。

「ありがとうございますよ」

席に戻ると、授業を続けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると、麗子が来て。

「亜紗美、帰ろう？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き麗子の家の前で。

「宿題、やろうよ？」

「うん、いいよ」

別れ、家に帰って宿題の教科書と筆記道具を手提げに入れて、キ

ツチンに行き。

「麗ちゃん家で、宿題して来るね」

家を出て、自転車に乗って麗子の家に向かった。

家に着き、自転車を降りてドアチャイムを押すと、麗子が顔を出し。

「どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、部屋に入ると小さいテーブルが出ていて座り、宿題を始め1時間後。

「終わった」

ノートを閉じて、亜紗美が手提げにしまっている。

「ジュース、持ってくるね」

部屋を出て行き、本棚からマンガ本を出して見ているとジュースとお菓子を持って入って来て、グラスに注ぎ目の前に置くと。

「ありがとう」

見ながら飲み、全部見終り立ち上がり。

「帰るね、バイバイ」

麗子の家を出て、自転車乗って帰る途中で、キョロキョロしている光孝が見え。

（どうしたんだろう？）

光孝の元に行き。

「どうしたの？」

「あつ！ 常磐さん、文房具店ってどこにあるか教えて？」

「いいよ」

文房具店に向かった。

文房具店に着き、自転車を降り店内に入り2人は、ノートが置いてある場所に行き1ずつノートを持ち亜紗美はシャープペンの替え芯を持って、レジで支払いをして店を出て自転車に乗ろうとした時、

笑みを浮かべ。

「ありがとう、助かったよ」

礼を言われた時、小さな胸がキュンと締め付けられる感じがした。

（何、この感じ？）

胸を押さえていると、心配そうな声で。

「だ・大丈夫？」

「何でもないから、じゃあ、明日」

別れ、家に帰りながら。

「あれって、何だったんだろう？ まっいいか」



？ 勘違い

5日が経った。

亜紗美は文房具店の事以来、光孝を見ると胸が締め付けられる感じは続いていた。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の前で、麗子に逢い。

「おはよう、亜紗美」

「おはよう、麗ちゃん」

挨拶を交わし、校庭を歩きながら。

「昨日のお笑い、見た？」

「うん、見たよ、面白かったね」

話しながら歩いていると、背後で。

「おはよう」

光孝の声がし、2人は振り向き。

「おはよう、時田くん」

麗子は挨拶したが、亜紗美は胸が締め付けられる感じがし。

「麗ちゃん、行こう」

「う・うん」

教室に行き、授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると、麗子が来て。

「亜紗美、帰ろう？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き麗子の家の前で。

「じゃあね」

「うん、ハイバイ」

別れ、家に帰り宿題をしてベッドで雑誌を見ながら。

（他の男子を見ても平気なのに、なんで、時田くんを見ると胸が締め付けられるんだろう？）

考えながらページを捲っていると、「お悩みコーナー」と言うページで目が留まった、そこには「1人の男の子を見ると、何も話す事が出来ない、どうすれば話せるように慣れますか、教えて下さい？」と書いてあって。

「私と、似てる？」

言い、アドバイス文を読むと。

「大丈夫と思い、大きく深呼吸して話し掛けてみれば、必ずうまく行くよ」と書いてあり。

「ふーん、やってみよう」

雑誌を閉じて、部屋を出た。

次の日。

「いつてきま す」

家を出て、学校に向かい歩き校門の所で光孝の姿が見え、昨日の雑誌のフレーズを思い出し、深呼吸をして。

「よしっ！」

光孝に話しかけようとした時、背後で。

「おはよう、亜紗美」

振り向き。

「おはよう、麗ちゃん」

挨拶を交わしていると、

「おはよう」

「おはよう、時田くん」

教室に向かいながら。

「もう、学校に慣れた？」

「うん、少しね」

話している姿を見て。

（いいな あ 楽しそう）

教室に行き、授業を受けた。

放課後。

光孝の前にクラスメイトの長谷川奈美が立ち。

「時田くん、ちょっといいかな？」

「うん」

教室を出て行くと、麗子が来て。

「亜紗美、帰ろう？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩きながら。

「亜紗美ってさあ」

「うん、何？」

「時田くんの事、避けているの？」

「別に、避けていないよ、何で？」

「だって、時田くんが来ると黙っちゃうから、そうかなあて思ってたさあ」

「べ・別に、そんなんじゃないから」

（時田くんを見ると、胸が締め付けられる感じがするんだもん）

下を向いて答えると。

「ご・ごめん、私の勘違いだったみたい、本当にごめんね」

「ううん、いいよ」

笑みを浮かべ、麗子の家の前で。

「じゃあね」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰る道を歩いていると隣に光孝が来て。

「常磐さん」

「あっ！ 時田くん」

「常磐さんの家って、この辺なの？」

「うん、時田くんの家も？」

「うん」

頷き。

「一緒に帰ろうよ？」

「う・うん、いいよ」

しゃべりながら帰り道を歩いていると、いままで締め付けられていた感じは消え、胸が温かくなる感じを感じ亜紗美の家の前で。

「私ん家、ここなんだ」

「ふうん、僕ん家とそんなに離れていないんだね、じゃあ、明日」  
「うん、バイバイ」

別れ、中に入って部屋で宿題を始めた。

？ 告白された

光孝としゃべる様になって5日が過ぎた。

「いつてきま す」

家を出て、学校に向かって歩き校門を潜り校庭を歩いていると、隣に光孝が来て。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室に向かって歩いていると麗子に逢い。

「おはよう、麗ちゃん」

「おはよう、亜紗美に時田くん」

教室に入り、授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると、麗子が来て。

「時田くん、ちよつといいかな？」

「うん、何？」

「ここじゃ、ちよつと」

「わかった」

教室を出て行き、亜紗美は帰ろうとしたが2人か気になり探しに行き、校舎の裏で2人を見つけ、物陰に隠れ会話を聞いた。

「ごめん、僕には好きな子がいるから石橋さんとは付き合えないよ、ごめんね」

「ううん、こつちこそ呼び出しゃって」

麗子に見つからない内に教室に戻り、ランドセルを背負うと麗子が元気なさそうに戻って来た、それもそのはずだ、告白した人にふられたのだから。

「麗ちゃん、先に帰るね、じゃあ」

「うん」

学校を出て、家に帰り部屋で宿題をしながら。

（時田くんの好きな子って、誰なのかな？）  
考えた。

光孝の好きな子はわからないまま、数日が過ぎた。

校門を潜り校庭を歩いていると、隣に光孝が来て。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、歩きながら。

「時田くんって、お笑いか好き？」

「うん、好きだよ、の神様とか毎週見てるよ」

「私も見てる、あれ面白いよね」

教室に行き、授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると。

「ねえ、常磐さん」

「うん、何？」

「話があるんだけど、いいかな？」

「いいよ、何？」

「ここじゃ、だから場所変えていい？」

教室を出て、校舎の裏で光孝は顔を赤くして。

「好きです、僕と付き合ってください」

いきなりの告白に。

「えっ！」

驚いた、なんと光孝の好きな子は亜紗美だったのだ。

「いいよ、付き合っても」

「本当？」

「うん、よろしくね」

「こ・こちらこそ」

教室に戻り、ランドセルを背負い学校を出て、帰り道を歩き亜紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入って部屋で宿題を始めた。

？ 初デート

2人が付き合い始め、初めての金曜日。

家を出て、学校に向かって歩き校門の前で、光孝に逢い。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室で授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると。

「常磐さん、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜紗美の家の前で。

「ねえ、常磐さん」

「うん、何？」

「明日、映画を観に行こうよ？」

「いいよ」

（これって、デートの誘い）

「じゃ、？時に迎え来るから」

「うん、待ってるから、バイバイ」

別れ、中に入って部屋で宿題を始めた。

次の日。

9時に起き、洗面所で顔を洗いリビングに行き母親に。

「おはよう」

挨拶をすると、驚きながら。

「どうしたの？ 休みの日はお昼過ぎまで寝ているのに？」

「？時に友達と映画を観に行くの、だから、ご飯」



朝食を全部食べて、光孝を待っていると。  
ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立っ  
ていて。

「おはよう、行こうか？」

「うん」

家を出て、自転車に乗り映画館に向かった。

映画館に着き、自転車を降りて入場口で半券と料金を払い、館内  
に入ってスクリーンから？列目に座りベルが鳴ると、徐々に暗くな  
りスクリーンに映像が映し出された、2人が観ている映画は週刊マ  
ンガ雑誌で人気のマンガのアニメ映画で、原作者が映画のために書  
き下ろした作品で2人は真剣に観て2時間後、映画は終わり館外に  
出て。

「眩しい」

手を目の上にかざしていると。

「お昼、ファミレスでいい？」

「うん」

自転車に乗り、ファミレスに向かった。

ファミレスに着き、自転車を降り店内に入りキョロキョロしてい  
ると、ウェイトレスが来て。

「いらっしやいませ、何名様でしょうか？」

「2人です」

答えると、空いている席に案内してくれ2人が座ると。

「お決まりになりましたら、お呼び下さい」

一礼をして去って行き、2人はメニューを見て選び始めて数分後。  
「決まった？」

「うん」

テーブルの隅に置いてあるブザーを押すと、ウェイトレスが来て。

「お決まりでしょうか？」

オーダーを取る準備をすると。

「常磐さんから、どうぞ」

「じゃあ、私はハンバーグセットのライスと、オレンジジュースで」

「僕も、ハンバーグセットのライスとコーラで、お願いします」

オーダーを取ると。

「少々、お待ち下さい」

一礼して去って行き数十分後、料理が運ばれて来て目の前に置かれ。

「以上で、ご注文はよろしいでしょうか？」

「はい」

「ごゆっくり、どうぞ」

一礼をして去って行き。

「いただきます」

食べ始め、全部食べ食休みをして。

「出ようか？」

「うん」

レジで支払いをして店を出て、自転車に乗り亜紗美の家の前で。

「今日は、楽しかったよ」

「喜んでもらえて嬉しいよ、じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入った。

？ 図書館での勉強

1 学期最後の日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かって歩き校門を潜り校庭を歩いていると、隣に光孝が来て。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室に行き授業を受けた。

放課後。

担任がクラフト封筒を持っては入って来て。

「では、通知表を渡しますので、呼ばれたら取りに来て下さい」

生徒の名を呼び始め、生徒全員に渡すと。

「明日から夏休みです、交通事故等には気をつけて、登校日に笑顔で逢いましょう、では日直さん」

「規律」

号令をかけると、生徒たちは立ち上がり。

「礼」

頭を下げ、担任が出て行くと。

「常磐さん、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜佐美の家の前で。

「常磐さん」

「うん、何？」

「明日から、一緒に勉強しない？」

「うん、いいよ」

「じゃあ、9時に迎えに来るよ」

「うん、わかった、バイバイ」

別れ、中に入りリビングに行き母親に。

「ただいま あ」

「おかえり」

ランドセルの中から、通知表を出し。

「はい」

渡すと、受け取り見て。

「よく、頑張りました」

頭を撫でて。

「じゃあ、夕飯は大好きなカニクリームコロッケにしましょう」

「わ い、やった」

部屋に行き、荷物を整理した。

次の日。

8時に起き、洗面所で顔を洗いリビングに行き母親に。

「おはよう」

「おはよう、朝飯はどっちするの？」

「パン」

答えると、キッチンで料理を作りテーブルに置かれると、食べ始め全部食べテレビを見ていると。

ピンポン。

ドアチャイムの音が聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立っ

「おはよう、行こうか？」

「うん」

外に出て、自転車に乗って図書館に向かった。

図書館に着き、自転車から降りて館内に入ると冷房が効いていて、2人は向かい合いに座り。

「じゃあ、5ページしよう?」  
「うん」

テキストを開いて記入を始め、3ページが終わると。  
「ちよつと、休憩しようか?」

「うん」

席を立ち、自動販売機にお金を入れ。

「何、飲む?」

「じゃあ、これ」

ストロベリーミルクのボタンを押し取り出すと、光孝はコーヒのボタンを押しベンチに座り飲んで。

「そろそろ、始めようか?」

「うん」

戻って、残りのページをして5ページが終わり片付けをし、図書館から出て。

「お昼、ハンバーガーでいい?」

「うん」

バーガーショップに向かった。

バーガーショップに着き、自転車を降りて店内に入りカウンターに立つと、女性店員が。

「いらっしやいませ、こちらでお召し上がりでしょうか?」

「はい」

答え。

「常磐さんから、どうぞ」

「私は、チーズとオレンジのMとポテトのSで」

「僕は、照り焼きとポテトのMとコーラのMで」

注文し食材をトレイに載せてもらうと、支払いをして空いている席に座り食べ、全部食べて。

「出ようか?」

「うん」

トレイを戻して店を出て、自転車に乗り亜紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入った。

？ 花火大会

夏休み最後の日。

すでに宿題の終わっている、亜紗美はテレビを見ていると電話がなり、母親が出て。

「常磐です、ちょっと待っててね」

受話器を置き、亜紗美の所に来て。

「麗ちゃんから、電話よ」

「はい」

テレビを消し、電話に出た。

「もしもし、何？」

電話は、宿題を写させてと言う内容で。

「いいよ、今から行くね」

電話を切り、部屋に行きテキストを手提げに入れ家を出て、自転車に乗り麗子の家に向かった。

家に着き、自転車を降りドアチャイムを押すと、麗子が顔を出し。

「いらつしゃい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、部屋に入ると手提げからテキストを出して。

「はい」

「ありがとう、本でも見てて」

受け取り、テキストを写し始め、亜紗美は本棚からマンガ本を出し見始め数十分後。

「終わった」

両方のテキストを閉じて、亜紗美に返し。

「ジュース、持って来るね」

部屋を出て行き数分後、ジュースを持って来てグラスに注ぎ、亜

紗美に。

「はい」

「ありがとう」

飲みながら見ていると。

「ねえ、夜、花火を観に行こうよ？」

「うん、いいよ」

「7時に集合ね」

「うん、わかった、じゃあ」

麗子の家を出て、家に帰る途中で光孝に逢い。

「ねえ、時田くん、夜、花火を観に行ける？」

「うん、行けるよ」

「じゃあ、7時に家に来てよ」

「うん、わかった」

別れ、家に帰り中に入ってリビングに行く。

「ただいま あ」

「おかえり」

「ご飯は、何？」

「野菜炒めでいい？」

「うん」

座ると、キッチンに行き夕飯を作りテーブルに置くと。

「いただきます」

全部食べ、光孝を待っていると。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立って  
いて。

「おまちどう」

「行こう」

外に出て、自転車に乗り麗子の家に向かった。

家の前に行くと、麗子とクラスメイトの加藤香織と坂本和美が待



っ  
ていて。

「おまちどう」

5人は、花火大会が開かれる会場に向かった。

会場に着くと、すでに大勢の観客が集まっていて屋台でかき氷を買い、一番観える場所に座り数分後、最初の花火が夜空に音を立てながら打ち上がり、大きな音と共に夜空に花を開くと拍手がわき5人も拍手していると、次々に打ち上げられ最後の？連発の花火が終わると観客たちは帰って行き、自転車に乗って来た道を戻り麗子の家の前で。

「じゃあね」

「うん、明日ね」

それぞれの家に帰って行き、亜紗美は光孝と帰り道を自転車を転がし、亜紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入ってリビングに行き母親に。

「ただいま あ」

「おかえり」

冷蔵庫からジュースを出し飲み、部屋に行き下着をバスルームに向かった。

## ？ ジョギング

2学期に入り、周りの木々が紅葉し始めた？月。

4時間目の体育の時間。

準備体操をして、担任の来るのを座って待っていると、職員室から出て来て生徒たちの前に来て。

「今日の体育の時間は、？周のタイムを計ります」

「え　え、やだ　あ」

声がわいたが、担任は女子たちに鉛筆と紙を渡すと。

「では、男子から始めますのでスタートラインに立って下さい」  
スタートラインに立つと。

「ヨーイ、ハイ」

掛け声と共に走り出し、担任の前を通るとタイムを言いそれをパトナーの女子が紙に書いて行つた、光孝が1番でゴールすると亜紗美はタイムが書いてある紙を持って、光孝の所に行き。

「はい」

紙を差し出すと、受け取り見て。

「タイム、落ちちゃったなあ」

残念がっていると。

「続いて、女子　い」

担任の声が響き、女子たちがスタートラインに立つと。

「ヨーイ、ハイ」

男子と同様に走り出して、ゴールをすると男子たちは紙を渡し、担任の元に集まると。

「今度からの体育の時間は、？周のタイムを計ります、じゃあ、教室に戻って給食にしましょう」

教室に戻り、給食を食べて残りの授業を受けた。

放課後。

「常磐さん、帰ろうよ?」

「うん」

学校を出て、帰り道をタイムが書いてある紙を見ながら。

「もっと、早く走れるようになりたいなーあ」

歩き、亜紗美の家の前で。

「ねえ、明日からジョギングしない?」

「うん、いいよ」

「じゃあ、6時に迎えに来るから」

「うん、わかった、バイバイ」

別れ、中に入ってリビングに行き母親に。

「ただいまーあ」

「おかえり」

その日は、早めにベッドに入った。

5時半に目覚まし時計が鳴って起きて、洗面所で顔を洗いリビングに行き母親に。

「おはよう」

「どうしたの、こんなに早く?」

「今日から、リレーの練習で6時に友達か迎えに来るの」

光孝を待っていると。

ピンポン。

ドアチャイムの音が聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立っ

「おはよう、行こうか?」

「うん」

家を出ると。

「家と学校を往復、6回しよう」

「うん」

軽い準備体操をして、ジョギングを始め6回の往復が終わると2人とも息が上がっていいて。

「ハアハアハア、じゃあ」

「うん、学校でね」

別れ、中に入りキッチンに行き母親に。

「た・ただいま」

「おかえり、ご飯は？」

「シャワー浴びてからにする」

下着を持って、シャワーで汗を流して着替え、朝食を食べ。

「いってきます」

家を出て、学校に向かった。

そして、ジョギングを始めて5日が経った体育の時間。

「ヨーイ、ハイ」

掛け声と共に走り出し、タイムを読み上げ書き込んで行くと、またしても光孝が1番でゴールをして光孝に紙を渡すと。

「やったーあ、1分タイムが縮んだ」

喜んでから。

「常磐さんも、ガンバって」

「うん」

スタートラインに立つと。

「ヨーイ、ハイ」

一斉に走り出し、ゴールをすると男子が紙を渡して行き、亜紗美がゴールをすると光孝が駆け寄り。

「この前より、タイムが縮んだよ」

紙を受け取り見ると、2分もタイムが縮んでいて。

「やった あ」

喜んでいると、チャイムが鳴り教室に戻って給食を食べて、残り

の授業を受けた。

## ？ 運動会

今日は、小学校での最後の運動会。

「いつてきま す」

家を出て、学校に向かって歩き校門の前で、光孝に逢い。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室に行くと女子たちが一箇所に集まっていて。

「どうしたんだろう？」

輪の中に入って行くと、そこには足に包帯を巻いた麗子が痛々しそくに座っていて。

「どうしたの、その足？」

「昨日、弟と遊んでいたらガラスで斬っちゃったんだ、楽しみにいるとしたのになーあ」

残念そうに話していると、女子たちが。

「どうする、麗子の代わり？」

話していると。

「私が、麗ちゃんの分も走るよ」

「本当？」

「うん」

返事をする。

「じゃあ、頼むね」

走者表の麗子の所に亜紗美の名が書かれると、担任が教室に来て出席を取ると。

「外に出て下さい」

担任の指示に従い外に出て並び、開会式が終わると運動会が始まり1年生を残して、昨日出して置いた席に座り、1年生の短距離走を見て数十分後、6年生の短距離の番になり席を立ち場所に行き、第1走者がスタートラインに立つとスターターの教師がピストルを

鳴らすと一斉に走り出し、ゴールをすると次々に走って行き光孝の番になってピストルの音と共に走り出し、最初は2位を走っていたが最後で抜き1位でゴールをして男子が終わって、女子の番になり男子と同様に行われ、亜紗美の番になりピストルの音と共に走り出し2位でゴールをして短距離走が終わり、1年生の玉入れと2年生のスプーンリレーを見て教室で軽い食事をして午後の部が始まった、1年と2年生は午前中だけなので3年生のクラス対抗リレーから始まり数十分後、6年生の対抗リレーの時間になって校庭の真ん中に行き走る順に並んで座り第1走者にバトンが渡されると、スタートラインに立ちピストルの音と共に走り出した、順位は2組、4組、1組、3組で行われていて亜紗美のクラスは3位を走っていて？走者目で2位になり、アンカーの光孝にバトンが渡ると1位を走っている4組を追いかけて行き、最後の直線で抜いてゴールすると4組の男女は喜んだ。

続いて女子の番になりピストルの音と共に走り出した、順位は3組、4組、2組、1組と最下位を走っていて？走者目で3位になり、亜紗美の1回目の出走の番が来て香織からバトンを受け取ると2位を走っている3組を追いかけて行き第2カーブで抜いて、和美にバトンを渡してトラックの中に入り息を整えていると、女子たちが集まって来て。

「亜紗美、大丈夫？」

「うん、平気、平気」

言っていると、歓声が聞こえ見ると1組が1位になっていて、亜紗美の2回目の出走の番が来て緑からバトンを受け取り2位と差をひらいてアンカーの妙子にバトンを渡すと独走でゴールした、1組は男女1位と言う好成绩で対抗リレーは終わり、閉会式で1組には2枚の賞状とトロフィが送られ運動会の幕は閉じ、教室に帰り担任を待っていると賞状とトロフィを持って入って来て教壇に置き。

「今日はおめでとう、皆でバンザイをしましょう」

生徒たちが立つと、担任が。

「バンザイ、バンザイ」

両手をあげると、生徒も手をあげて拍手をして席に座ると。

「では、今日は早く寝て、明後日に元気な姿で逢いましょうね、日直さんお願いします」

頼むと、日直が。

「起立」

立ち上がると。

「礼」

頭を下げると、担任が出て行くと。

「常磐さん、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入ってキッチンに行き母親に。

「ただいまーあ」

「おかえり」

「ご飯、出来たら呼んで」

部屋に行き、雑誌を見ているうちに寝てしまった。



？ 誕生日

今日は、亜紗美の？回目の誕生日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かって歩き校門を潜り校庭を歩いていると、隣に光孝が来て。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室に行き授業を受けた。

放課後。

麗子と香織と和美と緑をバースデーパーティーに誘い、ランドセルに授業道具を入れていると。

「常磐さん、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜紗美の家の前で、顔を赤くし。

「時田くん」

「何？」

「今日ね、私の誕生日なの、それでね、夜7時からパーティーをするんだけど、来てくれるかな？」

「わかった、7時だね、じゃあ」

「待ってるから」

別れ、中に入ってリビングに行き母親に。

「ただいまーあ」

「おかえり、夜、何人来るの？」

「5人だよ」

「じゃあ、お料理いっぱい作らないとね？」

「お願いね」

部屋に行き、宿題を始めた。

そして、7時近くになり。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると麗子と香織と和美と緑が立っていて。

「どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、4人が部屋に入ると。

「ジュース、持って来るね」

キッチンに行き、冷蔵庫を開けジュースのボトルを出していると。

「誰か、来たの？」

「麗子ちゃんたち」

答え、人数分のグラスとボトルをお盆に載せて、部屋に行きジュースを注ぎ目の前に置くと。

「ありがとう」

4人が飲んでいると、子機がなり。

「何？」

出ると、「用意が出来た」と言う電話で。

「出来たって、行こう？」

「うん」

部屋を出て、客間に行くとテーブルの上にはご馳走が出ていて、真ん中にケーキが置いてあり座ろうとした時。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立っていて。

「遅れて、ごめん」

「ううん、いいよ、上がって」

「おじゃまします」

上がり、一緒に客間に行き。

「時田くん、ここ座って？」

隣に座らせると、母親がロウソクに火をつけて電気を消し、バスデーソングを歌って火を吹き消すとパーティは始まり、にぎやかにやり1時間後が経って麗子たちが。

「私たち、帰るよ」

立つと、亜紗美は玄関まで送り。

「今日は、ありがとう」

「じゃあ、明日ね」

「うん、バイバイ」

別れ、客間に戻りケーキを食べていると。

「常磐さん、僕も帰るよ」

立つと、玄関まで送り靴を履いてポケットから小箱を出し。

「これ、プレゼント」

「ありがとう」

受け取ると。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、片づけを手伝っていると母親が。

「あの、男の子、なんて言う子？」

「時田光孝くん、今年、学校に転校して来たの」

「ふーん 亜紗美は友達がいっぱいだね」

「うん」

片づけて部屋に行き、プレゼントの箱を開けると、中には学校で流行っているマンガのキャラクターの人形が入っていて飾ると、下着を持ってバスルームに向かった。

## ？ 修学旅行

？月も終わりに近づき、今日から一泊二日の修学旅行。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かって歩き校門の前で、麗子に逢い。

「おはよう、亜紗美」

「おはよう、麗ちゃん」

挨拶を交わし、校門を潜ると生徒たちが集まっついて合流すると、4台のバスが校庭に入ってきて来ると生徒指導の教師が。

「バスに乗る時に、運転手さんとガイドさんに「よろしく願います」と言ってから乗りましょう」

「はい」

返事して、運転手とガイドに挨拶をしてバスに乗り込むと、バスは目的地に向かって走り出した、バスの中ではクイズやしりとりをして賑やかで数時間が経ち、目的地に到着しバスから降りると。

「記念撮影をしますので、1組の皆さん並んで下さい」

所定の場所に横二列に並ぶと、カメラマンがシャッターを切り全クラス撮ると、建造物を見学して。

「では、お昼にします、お昼を食べ終わったら1時間の自由時間にします」

生徒たちは散らばり、お昼を食べてお土産や夜食食べるお菓子を買ったたりしていると、集合の合図が流れ、バスに乗って今夜の旅館に向かった。

旅館に着き、バスから降りて旅館の中に入ると女将さんと従業員さんたちが。

「お待ちしておりました」

出迎えてくれ。

「お世話になりまーす」

頭を下げると、番頭さんが部屋のカギが入ったダンボールを持って来ると。

「各班の班長さん、カギを取りに来て下さい」

班長は前に出て、それぞれ部屋のカギをもらい部屋に散らばって行き、亜紗美も麗子と香織と和美と緑で部屋に行き、麗子が部屋を開け中に入り荷物を隅に置くと香織が。

「UNO、持ってきたんだ あ、やらない？」

「うん、やる」

UNOを楽しんでいると、戸を叩く音がして麗子が戸を開けると学級委員の町田加奈が麗子に言付けをして去って行き、戻って来て「ご飯だつて、行こう」

カードを片付け部屋を出て、大食堂に行くとテーブルの上には沢山の郷土料理が出ていて座り食べて、部屋に戻ると人数分の布団が敷いてあつて亜紗美は。

「うわ あ、温かそう」

飛び込みゴロゴロと転げ、麗子たちもやっていると戸を叩く音がして麗子が戸を開けると、荒井和英と戸川茂信と井川浩二と笹木俊宏、それに光孝が立っていて。

「遊びに来たぜえ」

5人は、部屋に入って茂信がグルツと部屋を見て。

「同じだな」

すると、緑が目の前にある枕を持ち。

「当たり前じゃん、バーカ」

枕を投げると、茂信の腹部に当たり。

「いてえなーあ」

枕を拾い、緑に投げ返したのを見て亜紗美が。

「男子と女子でドッジしようよ？」

「いいぜ」

布団をたたみ、麗子が枕を男子に投げると光孝がキャッチして、

緑に向かって投げると。

「キャッ！」

見事に中つて外野に回ると、和美が落ちている枕を拾い俊宏に投げ中てて俊宏がガイヤに回り、浩二が拾い亜紗美に投げると見事にキャッチして和英に向かって投げると和秀もキャッチして投げようとした時、戸が開いて担任が男子たちに。

「お前ら、部屋に戻りなさい」

「はい」

低い返事をし、部屋を出て行くと女子たちに。

「早く寝なさい」

「はい」

返事をし、担任が出て行くと麗子が。

「ねえ、お菓子食べよう？」

「うん」

バッグの中から、昼間買ったお菓子を出して布団に入り、しゃべりながら食べて。

「そろそろ、寝よう？」

「そうだね、おやすみ」

麗子が部屋の電気を消して、眠りに就いた。

次の日。

「お世話になりましたーあ」

頭を下げ、バスに乗り込むと第2の見学場所に向かい走り出し数分後、自然公園に着いてバスから降りて見学していると、生徒たちの前に公園で放し飼いに買われているクジャクや鹿が現れて生徒たちは喜んでいると、生徒指導の教師が。

「では、お昼にします、各班の班長さんはお弁当を取りに来てください」

各班の班長が担任の所に行き、旅館で作ってもらったお弁当をも

らい各班に持ち帰り食べていると、鹿たちが寄って来て生徒たちはお弁当のおかずを投げ与えたりしていて、亜紗美たちの所にも鹿たちが寄って来て。

「はい、お食べ」

おかずを投げると、食べ始めその姿を見ながら。

「かわいい　い」

お弁当を食べて、食休みをしていると。

「では、行きますよ　お」

声が聞こえると、各クラスに集合してバスに乗り　学校に向かって走り出した数時間後、学校に着きバスから降りて。

「ありがとうございますーあ」

頭を下げ、バスが校庭から出て行くと軽い連絡を受けて、その場で解散になり。

「常磐さん、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入りリビングに行き母親に。

「ただいまーあ」

「おかえり、とうだった旅行は？」

「結構、楽しかったよ」

荷物を洗面所に置き、部屋で雑誌を見ていると戸を音がして。

「何？」

「これから、買い物に行くんだけど、何が食べたい？」

「うーとね、ハンバーグが良い」

「わかった、買って来るね」

母親が出て行き、雑誌の続きを見ていると電話がなり、雑誌を伏せて電話に出た。

「はい、常磐です」

電話は、単身赴任中の父親だった。

「お父さん元気、私もお母さんも元気だよ、うん、わかったよ、言  
つておくね」

電話を切ると、母親が帰って来て。

「お父さん、明日、帰って来るって」

「そう」

夕食の用意を始めた。



## ？ 帰って来た父親

今日は、3ヶ月ぶりに父親が帰ってくる日。

「いつてきま す」

家を出て、学校に向かい歩き校門の所で、麗子に逢い。

「おはよう、亜紗美」

「おはよう、麗ちゃん」

「何か、いい事でもあったの？」

「うん、今日ね、お父さんが帰って来るの」  
嬉しそうに話すと。

「亜紗美、お父さん好きだから、よかったね」  
「うん」

教室に行き、授業を受けた。

放課後。

「常磐さん、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜紗美の家の前で。

「常磐さん」

「うん、何？」

「CD、買いに付き合つてよ」

「うん、いいよ、待ってて」

中に入り、部屋に行き財布を持って家を出て、自転車を転がしながら光孝の家に向かった。

数分後、光孝は立ち止まり。

「ここが、僕ん家だよ」

家が建っている場所は数年前まで、空き地で麗子たちと遅くまで遊んだ場所だった。

「ここって」

「どうかしたの？」

「昔、麗子ちゃんたちと、よくこの場所で遊んだんだーあ」  
思い出を話した。

「へへえ、そうなんだ、ちょっと待ってて」

中に入って数分後。出て来て自転車に乗り。

「行こう？」

「うん」

CDショップに向かった。

CDショップに着き、自転車を降り店内に入りCDアルバムを持って、レジで支払いをし店を出て来た道を戻り光孝の家の前で。

「一緒に、聴こうよ？」

「うん」

上がり、部屋でCDを聴いて数十分後。

「そろそろ、帰るよ」

「じゃあ、送るよ」

家を出て、自転車を転がし亜紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入ると玄関に見慣れた靴が脱いであり、急いでリビン  
グに行くと3ヶ月ぶりに見る父親がいて。

「お父さん、おかえり」

「ただいま、亜紗美もおかえり」

笑みを浮かべ言うと。

「た・ただいま」

言っていると、母親が。

「亜紗美、夕飯、何食べたい？」  
すると、父親が。

「久々に、外で食べようか？」

「うん、行こう、行こう」  
その夜は、外で食事をした。

？ ホワイトクリスマス

冬休みになって数日が過ぎ、今日はクリスマス。

お昼近くに起きて、洗面所で顔を洗いキッチンに行き母親に。

「おはよう」

「おはようじゃないわよ、もうお昼よ」

「だって、テレビが面白かったんだもん、それよりご飯」

「はい、はい」

キッチンで、料理を作りテーブルに置くと。

「いただきまーす」

食べていると、電話がなり母親が出て。

「ちよつと、待っててね」

受話器を置き、亜紗美の所に来て。

「麗ちゃんから、電話よ」

「ふぁ い」

口の中の食べ物を飲み込でから、電話に出た。

「もしもし、何？」

電話は、クリスマス会で呼ぶ人を決めようよ？」

「今から、行くね」

電話を切り、部屋で着替えをして家を出て、自転車に乗り麗子の家に向かった。

家に着き、自転車を降りてドアチャイムを押すと、麗子が顔を出し。

「いらしゃい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、部屋に入ると。

「それで、誰を呼ぼうか？」

「え とね、香織ちゃんと和美ちゃんと緑ちゃんで、いいよ決めると。」

「男子はどうするの？ 亜紗美は時田くんと来るんでしょう」

「うん、じゃあ、和英と茂信と浩二し俊宏にしよう」

それぞれの家に電話をすると。

「私、帰るね」

「うん、バイバイ」

麗子の家を出て、自転車に乗り光孝の家に向かった。

光孝の家に着き、自転車を降りドアチャイムを押すと、光孝が出て。

「やあ、常磐さん、何？」

「夜、麗子ちゃん家でクリスマス会を遣るんだけど、来れる？」

「うん、大丈夫だよ」

「じゃあ、7時に家に来てよ」

「うん、わかった」

別れ、家に帰って中に入りキッチンに行き、母親に。

「ただいま あ」

「おかえり」

「夜、麗子ちゃん家に行くから、ご飯」

「はい、はい」

料理を作り、テーブルに置くと食べ始め全部食べて。

「ごちそうさま」

光孝を待っていると。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立っ  
ていて。

「おまちどう」

「行こう」

外に出て、自転車に乗り麗子の家に向かった。

家の前には6台の自転車が停まっっていて、自転車を降りてドアチャイムを押すと、麗子が顔を出し。

「いらっしやい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、客間に行くと言いて。

「じゃあ、始めようか？ グラス持って」

目の前に置いてあるグラスを持って。

「かんぱーい」

グラスを軽く重ねクリスマス会は始まり、にぎやかに遣り数時間が過ぎ、女子たちは立ち上がり。

「私たち、帰るね、じゃあ」

「じゃあ、俺たちも」

帰って行き数分後、亜紗美は立ち上がり。

「麗ちゃん、私たちも帰るね」

「うん、バイバイ」

麗子の家を出て、自転車を転がし帰り道を歩いていると、目の前に白い物が。

「うわ あ、雪だ、ホワイトクリスマスだ あ」

空を見上げ、はしゃいでいると。

「常磐さん」

「うん、何？」

光孝の方を見ると、ポケットから小箱を出し。

「これ、クリスマスプレゼント」

「あ・ありがとう」

受け取り歩き、亜紗美の家の前で。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入って部屋にプレゼントを置き下着を持ってバスルームに行き、シャワーを浴びて部屋に戻りプレゼントを開けると、中

には光孝がランドセルに付けているのと同じキーホルダーが入っていて、ランドセルに付けてベッドに入った。

？ お正月

日は経ち、新しい年を迎えた。

亜紗美は部屋を出て、リビングに行くと父親がお酒を飲みながらテレビを見ていて。

「明けまして。おめでとう」

「おめでとう」

新年の挨拶を交わし、おせち料理を食べていると、父親がポケットからお年玉袋を出し。

「はい、お年玉」

「ありがとう」

受け取り、おせちを食べ部屋に行きお年玉袋を開けると、中に5千円札が入っていて貯金箱に入れて雑誌を見ていると。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると麗子と香織と和美と緑が立っていて。

「おめでとう、皆」

「おめでとう」

新年の挨拶を交わすと。

「ねえ、初詣に行こうよ？」

「うん、いいよ、待ってて」

ドアを締め、リビングに行き両親に。

「初詣に出に行ってくるね」

家を出て、自転車に乗って近くの神社に向かった。

神社に着き、自転車を降りて境内に行くと大勢の人が参拝に来ていて、5人も賽銭箱に向かって歩いてみると、光孝に逢った。

「やあ、常磐さん」



「おめでとう、時田くんはもうお参りしたの？」

「うん、じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、歩きながら。

（時田くん、どんなお願いしたんだろう？）

賽千箱にお金を投げ入れ、それぞれのお願いをした。

（ずっと、時田くんといられますように）

心の中でお願いをし、神社を後にし自転車に乗り。

「じゃあね」

「バイバイ」

別れ、家に帰ると家の前に見慣れた車が停まっていた中に入り、客間に行くと父と父の弟夫婦が来ていて。

「叔父さん、叔母さん、明けまして、おめでとうございます」

新年の挨拶をする。

「おめでとう、亜紗美ちゃん、そうだ」

「おい、お年玉」

奥さんに言くと、バックの中からお年玉袋を出し。

「はい、お年玉」

「あ・ありがとうございます」

礼を言い、受け取り部屋に行きお年玉袋を開けると、中に1万5千円札が入っていて貯金箱に入れた。

三が日が過ぎ。

宿題の書初めをして、洗面所で習字道具を洗っていると電話がない母親が出て。

「ちよっと、待っててね」

受話器を横に置き。

「麗子ちゃんから、電話よ　お」

「はい」

水を止め、電話に出た。

「もしもし、何？」

電話は、「ゲームを買い付き合っ」と言う内容で。

「いいよ、今から行くね」

電話を切り、道具を片付けて財布を持って家を出て、自転車に乗って麗子の家に向かった。

家の前に行くと、麗子が待っていて。

「おまちどう」

「行こう？」

「うん」

ゲームショップに向かった。

ゲームショップに着き、自転車を降りて店内に入ると大勢の人が買い物をしていて、麗子は5日前に発売されたゲームを持ってレジで支払いをして店を時、光孝と見知らぬ女の子に逢った。

「やあ、常磐さんに石橋さん」

「時田くん、その子、誰？」

麗子が聞くと。

「紹介するよ、従姉妹の時田歩美って言うんだ、歩美、挨拶しなさい」

「こんにちは、時田歩美です」  
頭を下げると。

「こ・こんにちは」

2人は軽い会釈をすると、光孝は麗子の持っている袋を見て。

「何の、ゲームを買ったの？」

聞かれ、袋から出して。

「これえ」

見せると。

「そのゲームは、攻略本を見て遣った方がいいよ」

「そうなの、じゃあ、買ってみるよ、ありがとう、行こう?」  
「うん、じゃあ」

光孝と別れ、本屋に向かった。

本屋に着き、自転車を降りて店内に入り攻略本を持ってレジで支払いをして店を出て、来た道を戻り麗子の家の前で。

「ゲーム、しよう?」

「うん」

中に入り、部屋に行きゲームを楽しみ1時間が経ち。

「私、帰るよ」

「うん、バイバイ」

麗子の家を出て、家に帰った。

## ？ 父の入院

3学期が始まり、数日経った。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かって歩き校門を潜り校庭を歩いていると、隣に光孝が来て。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室に行き授業を受けていると、教室の戸が開き生徒指導の教師が担任に耳打ちをすると。

「常磐さん、ちょっと」

呼ばれ、教師と廊下に出ると。

「今、お家の方から電話があつてお父さんが事故で病院に運ばれたらしい」

「えっ！ お父さんが」

驚きを隠せないでいると、教師はポケットから病院の名前が書いてある紙を出し。

「早く、行ってやれ」

「はい」

紙を受け取り、学校を出て病院に向かった。

近くの市民病院に着き、受付で父親の名前を言い病室を聞いてエレベーターでその階に行き、父親のいる病室の戸を叩くと。

「はい、どうぞ」

母親の声がし、病室に入ると頭と腕に包帯を巻いた父親が寝いてて。

「お父さん」

父親に近づこうとした時、母親が小さな声で。

「今、麻酔で寝た所だから」

「それで、お父さん、大丈夫なの？」

「大丈夫よ、骨折だけだから」

「じゃあ、学校に戻るね」

病室から出ようとした時。

「お母さん、お父さんが気がつくまでいなくっちゃなんないから」  
「わかった、じゃあ」

病院から出て、学校に戻り残りの授業を受けた。

放課後。

「常磐さん、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜紗美の家の前で。

「常磐さん」

「うん、何？」

「夜、食べに行こうよ？」

「うん、いいよ」

「じゃあ、6時に迎えに来るよ」

「うん、わかった、待ってるよ」

別れ、中に入りリビングに行き。

「ただ、そくだ、病院だっけ」

部屋に行き、宿題をした。

そして、6時になり。

ピンポン

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立っている。  
いて。

「お待ちどう、行こうか？」

「うん」

家に出て、自転車に乗ってファミレスに向かった。

ファミレス着き、自転車に降りて店内に入ると夕食時なので大勢の人が食事をしていて、2人がキョロキョロしていると目の前にウエイトレスが来て。

「いらっしやいませ、何名様ですか？」

「2人です」

答えると、空いている席に案内してくれ座ると。

「お決まりになりましたら、お呼び下さい」

去って行くと、メニューを広げ選び始め数分後。

「決まった？」

「うん」

テーブルの隅に置いてあるブザーを押すと、ウエイトレスが来て。

「お決まりになりましたか？」

オーダーを取る準備をすると。

「常盤さんから、どうぞ」

「じゃあ、私はスパゲティのミートソースとレモンスカッシュで」

「僕は、サイコロステーキセットのご飯とコーラで」

オーダーを取ると、

「少々、お待ち下さい」

一礼して去って行き数十分後、料理が運ばれて来て目の前に置かれ。

「以上で、ご注文はよろしいでしょうか？」

「はい」

「ごゆっくり、どうぞ」

一礼をして去って行き。

「いただきます」

食べ始め、全部食べ食休みをして。

「出ようか？」

「うん」

レジで支払いをして店を出て、自転車に乗り亜紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入ろうとした時、母が帰って来て。

「どこかに、行って来たの？」

「時田くんにご飯を食べに、それよりお父さんは？」

「大丈夫、ご飯食べられたから」

「よかった」

中に入り、下着を持ってバスルームに向かった。

？ 手作りチョコ

2月に入り、明日は男の子に思いを伝えるバレンタインデー。  
「いつてきます」

家を出て、学校に向かって歩き校門の前で、光孝に逢い。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室に行き授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると、麗子が来て。

「亜紗美、帰ろう？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き麗子の家の前で。

「ねえ、チョコ買いに行こうよ？」

「うん、いいよ、じゃあ」

別れ、家に帰り中に入りリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり」

部屋に行き、ランドセルを置き財布を持って家を出て、自転車に  
乗り麗子の家に向かった。

家の前で、麗子が待っていて。

「お待ちどう」

「行こう」

「うん」

スーパーに向かった。



スーパーに着き、自転車を降り店内に入りチョコが置いてある場所に行くと、大勢の女の子たちかチョコを選んでいて、麗子は2つのチョコを持ち。

「亜紗美は、買わないの？」

「うん、今年は作ろうかなって思う」

お菓子売り場で、板チャコ2枚と「初めてのチョコ作り」と言うチョコ作りの道具が入った箱を買い物籠に入れレジで支払いをして店を出て、来た道を戻り麗子の家の前で。

「ゲーム、しようよ？」

「うん」

中に入り、部屋でゲームをしていると。

「ねえ、麗ちゃん」

「何？」

「この前、時田くんに言われて攻略本を買ったゲーム、進んだ？」

「うん、大分、見たい？」

「うん」

頷くと、ゲーム機の中からCDを出してこの前買ったCDを入れ電源を入れると、画面にタイトルが出て冒険の続きの選択ボタンを押すと、画面が変わりキャラクターを操作していると画面が黒くなり強そうな敵キャラが出て来て。

「何か、強そう」

「こんなの、今の私の敵じゃないわよ」

戦う、のコマンドを押して戦い始め、敵に切りつけると敵キャラの下に4桁の小さい数字が出て。

「何、この数字？」

「敵に与えたダメージだよ」

言っていると、敵は消えてしまい麗子のキャラが勝った。

「凄い、麗ちゃん」

「でも、ここまでにするのに結構難しかったよ」

「ふーん、そんなに難しいんだ、ゲーム？」

「うん、昔、従兄弟とこのゲームをやった時なんて全然わかんなくって、すぐにゲームオーバーになっちゃったんだ。でも時田くんに教えてもらった本を見てやっているから、ちよつとずつ理解して進めるようになったんだーあ」

「そうなんだ、時田くんってゲームの先生みたいだねえ？」

「そうだね」

2人でクスクスと笑い、違うゲームを遣り。

「私、帰るね」

「うん、バイバイ」

麗子の家を出て、家に帰り中に入りキッチンに行き。

「ただいま あ」

「おかえり」

「ご飯、食べたらキッチン使っていい？」

「いいけど、ちゃんと後片付けしてよ」

「うん」

夕飯を食べて、後片付けを手伝い母親がテレビを見始めると、スーパーの袋を持ってキッチンに行き袋の中からチョコを出しボウルの中で砕き、鍋にお湯を入れ火にかけて沸騰するとボウルを浸けると、チョコはみるみる溶けて原形を無くすと「チョコ作り」の箱を開けハート形の型を出してお皿に並べチョコを流し込みヘラで平らにして冷凍庫に入れ、部屋で包装紙を選んだが気に入ったのが無く「買いに行こう？」

財布を持って家を出て、自転車に乗り文房具店に向かった。

文房具店に着き、自転車を降りて店内に入り包装紙が置いてある場所に行き、選び始め数秒後。

「これにしよう」と

選んだのは、小さなハートが散りばめられた包装紙を持ちレジで支払いをして店を出て、来た道を戻り家に入り冷凍庫を開けチョコを取り出すと、見事に凍っていて。

「やった あ、出来てる」

型から一つ一つ抜き箱に入れ、包装紙で包んでリボンをして。

「これで、よし」と

冷蔵庫に入れ、部屋に行き下着を持ってバスルームに向かった。

次の日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門を潜り校庭を歩いていると、隣に麗子が来て。

「おはよう、亜紗美」

「おはよう、麗ちゃん」

挨拶を交わし、校庭を歩きながら。

「チヨコ、出来た？」

「うん」

笑みを浮べ頷き、教室に行き授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると、光孝の所に桜井知恵と角田妙子が来て顔を赤くしチヨコを差し出し。

「こ・これ食べて」

「あ・ありがとう」

受け取ると、2人は去って行き。

「常磐さん、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜紗美の家の前で。

「ちよっと、待ってて」

中に入り、冷蔵庫からチヨコを出して家を出て、顔を赤くしチヨコを差し出し。

「これ、作ったの」

「あ・ありがとう」

受け取り。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入り部屋で宿題をした。

？ 初めてのキス

3月に入り、小学校最後の月になった。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の所で、光孝に逢い。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室に向かった。

そして、3時間目のチャイムがなり、担任が原稿用紙の束を持って入って来て教壇に置くと。

「え」と、今日の3・4時間目は作文2枚書いてもらいます」

「ええ」

声が上がったが、用紙を配り始め全員に行き渡ると。

「6年生になってからと言う題で、書いて下さい」

生徒たちは作文を書き始め、亜紗美は光孝との出会いや色々な思い出を書いていると、3時間目の終了のチャイムがなり教室を出て行く生徒たちがいたが、亜紗美は書き続けていると麗子が来て。

「ねえ、書けてる？」

「うん、2枚目に行ったとこ、麗ちゃんは？」

「まだ、半分も書いてないよ」

話していると、チャイムがなって席を離れていた生徒たちは座り続きを書き始め、書きあがった生徒は担任に出して次の授業の予習を始め、亜紗美も出し予習をしているとチャイムがなり。

「書けなかった人は宿題にします、じゃあ、給食にしましょう」

給食係りが給食の用意をして、食べて昼休みをして5時間目の授業を受けた。

放課後。

「常磐さん、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入ってリビング行くと腕に包帯を巻いただけの父親が座っていて。

「亜紗美、おかえり」

「ただいま、お父さんもおかえり」

「ただいま」

部屋に行こうとした時。

「亜紗美」

「うん、何？」

「宿題は、どの位で終わるんだ？」

「今日は、そんなに出てないから1時間かな、何で？」

「さつき、会社に電話したら社長が出て、快気パーティをして下さるそうなので、後2時間後に行くから、聞いたんだ？」

「ふーん、じゃあ、してくるね」

部屋で宿題を始め、終わるとリビングに行き。

「終わったよ」

「じゃあ、行こうか？」

FAXで送られて来た地図を持って、家を出て。

「社長の家は、近そうだから歩いて行くぞ」

歩き始め、歩きながら。

「ここも、しばらく見ないうちに変わったなーあ」

回りを見ながら歩き、数分歩き父親が立ち止まると亜紗美は驚いた、なんと社長の家は光孝の家だった。

（えっ！ お父さんの会社の社長って時田くんのお父さん？）

父親がドアチャイムを押し、ドアを開け。

「こんばんは、常磐です」

すると、奥から女の人が出て来た。

（この人が、時田くんのお母さん、きれーえ）

「お待ちしていました、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、奥さんと客間に行くとテーブルの上には沢山の料理が出ていて、そこに中太りの男の人が座っていて。

「これは、これは、常磐さん」

「し・社長、お呼びいただきありがとうございます」  
頭を下げると。

「固い事は抜きで、どうぞ」

席を勧められると。

「し・失礼します」

座り、料理を食べていると背後で。

「こ・こんばんは」

光孝の声がし、亜紗美は振り向き。

「こんばんは、時田くん」

「あつ！ 常磐さん」

驚いていると、光孝の父親が。

「光孝、知っているのか？」

「うん、同じクラスなんだあ」

答えると、目を真ん丸くして。

「家の息子と、社員の娘さんが同じクラスだと、これは驚いた、なあ常磐さん」

「はあ」

2人の父親は、ビールを飲んでいると。

「常磐さん、部屋に行こうよ？」

「うん」

2階の光孝の部屋に入ると、色々な家電と沢山のマンガ本が入っている本棚があつて。

「好きな所に、座って」

「うん」

その場に座ると。

「音楽でも、聴く？」

「うん」

リモコンの再生ボタンを押すと、スピーカーから歌が流れて来た、その歌は亜紗美が好きなアーティストの歌で。

「時田くん、このアーティスト好きなの？」

「うん、常磐さんも」

「うん、いいよね　え」

「うん」

歌を聴いていると、脳裏に昨日読んだ（キスはレモンのような味・  
・）雑誌のフレーズかよぎり、顔を赤くして。

「時田くん、キスってレモンみたいな味がすんだって、してみようか？」

「えっ！　う、うん」

光孝も顔を赤くし頷き、亜紗美が目をつぶると肩に手を置き唇を重ね数秒後、唇を離し。

「味、しないねえ？」

「うん」

話していると、戸を叩く音がし。

「はい、どうぞ」

戸が開き、亜紗美の母親が。

「亜紗美、お母さん帰るけど、どうする？」

「まだ、いる」

「あまり、遅くならないでね」

「うん、わかったよ」

母親が帰って行くと。

「ジューズ、持って来るから本でも見せて」

部屋を出て行き、本棚からマンガ本を2・3冊出し見ていると、



光孝が戻って来てグラスにジュースを注ぎ。

「どうぞ」

「ありがとう」

一口飲み見ていると、光孝もマンガ本を見始めて数時間後、亜紗美は本を片付け。

「私、帰るよ」

「じゃあ、送るよ」

家を出て、夜道を歩き亜紗美の家の前で。

「おやすみ」

「うん、おやすみ」

別れ、中に入って下着を持ってバスルームに向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0110z/>

---

ずっと、このままだよ

2011年12月20日23時45分発行